

## 品種 フクユタカ

月	6			7			8			9			10			11		
	旬	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	

### 栽培管理

排水対策  
堆肥施用

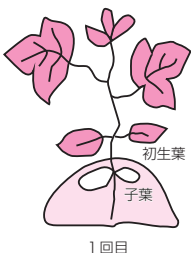
耕起・砕土・整地  
土壌改良材散布  
耕起前除草剤散布

除草剤散布  
播種・施肥

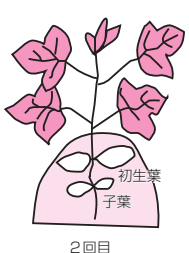
(一回目)  
中耕・培土

(二回目)  
中耕・培土

適宜うね溝かん水を行う  
乾燥が続く場合は



1回目



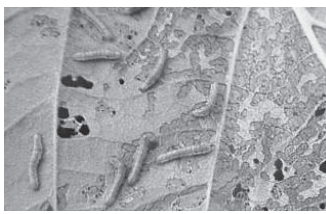
2回目



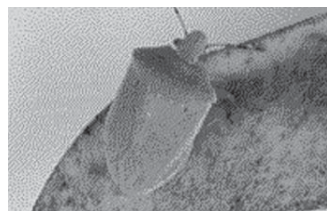
食害を受けた葉（白葉変）



ミナミアオカメムシの若齢幼虫



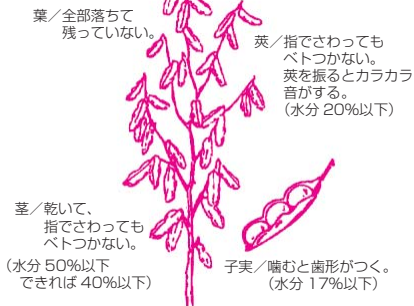
ハスモンヨトウの二齢幼虫



ミナミアオカメムシの成虫

収

穫



葉/全部落ちて残っていない。  
莢/指でさわってもベトつかない。莢を振るとカラカラ音がする。(水分20%以下)

茎/乾いて、指でさわってもベトつかない。(水分50%以下、できれば40%以下)

子実/噛むと歯形がつく。(水分17%以下)

### 生育

初生葉展開	開花期	莢伸長期	子実肥大期	成熟期
-------	-----	------	-------	-----

### 病害虫防除

#### 種子消毒

キヒゲンR-2フロアブルの塗沫 (苗立枯病・葉斑病・タネハエ)	キヒゲンの1%種子粉衣 (ハト・紫斑病・タネハエ)
200 ml	100 g

過去10年の梅雨入りと梅雨明け

年	九州北部		梅雨時期の降水量の 平年比(地域平年値)%
	入り	明け	
2010年	6月12日頃	7月17日頃	111
2011年	5月21日頃	7月8日頃	119
2012年	5月30日頃	7月23日頃	138
2013年	5月27日頃	7月8日頃	72
2014年	6月2日頃	7月20日頃	87
2015年	6月2日頃	7月29日頃	102
2016年	6月4日頃	7月18日頃	117
2017年	6月20日頃	7月13日頃	67
2018年	6月5日頃	7月9日頃	110
2019年	6月26日頃	7月25日頃	100
平年	6月5日頃	7月19日頃	

・「平年」は、平成22年(2010)までの過去30年の平均値です。  
 梅雨の合間をぬって適期播種に努めましょう!

#### 農薬散布時の飛散を防止しよう!

- 散布前に必ずラベルの確認
- 散布時には近接作物や住宅街への飛散防止を徹底
- 散布後は必ず散布器具(タンク、ホース等)を洗浄
- 防除履歴の正確な記載

開花期後20~30日 (9月中旬~下旬)	開花期後40日 (10月上旬)
※カメムシ類が多い場合は、トレボン乳剤(1,000倍)を混用してください。 <b>トレボン粉剤DL 4kg</b> (ハスモンヨトウ)	※ハスモンヨトウが多い場合は、ノモルト乳剤(2,000倍)を混用してください。 <b>スタークル液剤10</b> <b>スタークル粉剤DL 3kg</b> (カメムシ類)
※カメムシ類が多い場合は、トレボン乳剤(1,000倍)を混用してください。 <b>プレバンプロアブル 4,000倍</b> <b>150g</b> (ハスモンヨトウ)	※ハスモンヨトウが多い場合は、ノモルト乳剤(2,000倍)を混用してください。 <b>スタークル液剤10</b> <b>スタークル粉剤DL 3kg</b> (カメムシ類)
※カメムシ類が多い場合は、トレボン乳剤(1,000倍)を混用してください。 <b>スミチオンベルクート粉剤DL 3kg</b> (紫斑病)	※ハスモンヨトウが多い場合は、ノモルト乳剤(2,000倍)を混用してください。 <b>スタークル液剤10</b> <b>スタークル粉剤DL 3kg</b> (カメムシ類)

#### ハスモンヨトウ

- 防除効果は若齢幼虫期が高く、幼虫が大きくなるにつれて低くなる。
- 8月中~下旬に白変葉の発生が多い場合は8月末までに防除を行う。
- 薬剤散布は、できるだけ液剤で、広い地域で一斉に行う。
- 開花期後~莢伸長期(9月上~中旬)の葉の食害は、減収が大きい。

#### カメムシ類

- 莢肥大期~子実肥大期(9月中~下旬)の莢の吸汁害は、減収が大きく青立ちとなる。
- 成熟期頃まで加害するミナミアオカメムシの多発性により、品質の低下が問題となっている。
- ミナミアオカメムシは10月に急増するため、9月下旬~10月上旬の防除が必要。
- ミナミアオカメムシに効果が低い剤もあるため、こよみに記載の薬剤を使用する。

#### 紫斑病

- 種子消毒を必ず行う。
- 莢肥大期~子実肥大期(9月中~下旬)に雨が多いと、発生が多い。

### 土づくり・播種時期・施肥体系の見直しによって、高品質・高収量の大豆づくりをめざそう!

- ★問題点  
 JAむなかた管内では有効態リン酸、加里および腐植(有機物)が少ない。  
 ★対策は?  
 ① 堆肥の施用、わらすき込みなどにより、地力向上を図る。(2t/10a)  
 ② PKC30号の施用により、バランスの良い肥料成分の供給に努める。

#### 排水対策

- ★暗渠、明渠の施工、暗渠栓の点検確認。隣接水田、用水路からの漏水に注意しましょう。  
 ★排水良好なほ場を選び、転作ほ場の団地化を図る。うね立て播種を行い、表面排水を促す。

#### 土壌改良

pHを6.0~6.5に矯正する(土壌診断により石灰の投入量を調節する)。

資材名	施用量(kg/10a)	用途
苦土石灰又は消石灰	60~100	pHが低い圃場
塩化加里	15	加里不足の圃場
粒状ようりん	20	リン酸不足の圃場

#### 施肥

肥料名	基肥(kg/10a)	N-P-K
PKC30号(0-20-10)	30	0-6.0-3.0
くみあい化成ベスト444(14-14-14) 又は大豆550(5-15-20)	10-15 (収量が低下しているほ場、遅まきのほ場で使用)	1.4-1.4-1.4 2.1-2.1-2.1
	30-40 (収量が低下しているほ場、遅まきのほ場で使用)	1.5-4.5-6.0 2.0-6.0-8.0

#### 播種・出芽・苗立ち

※6月下旬には播種準備を整えて、7月上旬から天気を見計らい適期播種してください。

	播種時期	条間	株間	播種量	播種深度
早播	7月1日~10日	70cm	25cm	3kg	基準 3cm 土壌水分が多い
適期播	7月11日~20日	70cm	20~15cm	4~6kg	浅く 土壌水分が少ない
遅播	7月21日~31日	70~50cm	15cm	8kg	やや深く(5~6cm) +鎮圧する

- ハトの食害が多いところでは、地域全体の播種時期を統一する。
- 種子消毒のキヒゲン及びキヒゲンR-2フロアブルは、鳥害防止に効果がある。

#### 中耕・培土

★中耕・培土は除草対策、倒伏防止、排水対策、根の発生促進、根粒菌の増加、地力窒素の発現促進等、多収栽培のための重要な作業である。

- 1回目: 本葉3葉期に子葉節まで培土する(播種後約2週間目頃)。
- 2回目: 本葉5葉期に初生葉節まで培土する(播種後約3週間目頃)。



#### 除草

	除草剤名	適用雑草	処理時期	使用方法	使用量/10a	希釈水量/10a
播種期	ラウンドアップマックスロード	一年生雑草	耕起前又は出芽前	雑草	200~500ml	50~100ℓ
	ブリグロックスL		播種前又は植付前	雑草	600~1,000ml	100~150ℓ
	ラクサー乳剤		播種後出芽前(雑草生育期草丈20cm以下)	茎葉散布		
	サターンバオ乳剤		播種後出芽前(雑草発生前)	全面	400~800ml	100ℓ
	クリアターン乳剤		播種直後(雑草発生前)	全面	600~1,000ml	70~100ℓ
	フルミオWDG	一年生広葉雑草	播種後出芽前(雑草発生前)	全面	500~800ml	70~100ℓ
大豆生育期	ポルトフロアブル	一年生イネ科雑草 スズメノカタビラを除く	雑草生育期(イネ科雑草3~10葉期収穫30日前まで)	雑草	200~300ml	50~100ℓ
	大豆バサグラン液剤	一年生雑草 イネ科を除く	大豆の2葉期~開花前(雑草の生育初期~6葉期)収穫45日前まで	雑草	100~150ml	100ℓ
			大豆の生育期(雑草の生育初期~6葉期)収穫45日前まで	畦間雑草	300~500ml	
	アタックショット乳剤	一年生広葉雑草	本葉2葉期~開花前(雑草生育期)但し、収穫45日前まで	雑草	30~50ml	100ℓ

- 播種直後に残草が多い場合は、ラクサー乳剤・サターンバオ乳剤・クリアターン乳剤のいずれかと、ブリグロックスL(800ml/10a)との混用処理を行う。
- 土壌の表面が著しく乾燥していると除草効果が劣るので、希釈水量を多くする。
- ホソアオイトウ多発圃場では、ラクサー又はクリアターン乳剤とフルミオWDGを混合して処理を行う。
- アサガオ類多発圃場ではサターンバオ乳剤とフルミオWDGを混用して処理を行う。
- どの除草剤も散布した後は散布器のタンクやホース・ノズルを十分に洗浄する。特にフルミオWDGは本体に付属している専用洗浄剤(不活性化)を使用して洗浄する必要があるので注意すること。
- 大豆バサグラン液剤の使用については、重複散布すると薬害を助長することがあるので散布には十分注意すること。
- アタックショット乳剤は散布後、一過性の薬害が生じる。

#### 収穫

★コンバイン収穫の留意点

- コンバインによる収穫開始適期は、莢の色が莢の褐色よりやや黒色を帯びるころで、手で折ると軽くポキッと折れる状態(茎水分50%以下で子実水分が18%以下)で刈り取る。
- 早刈りすると汚損粒・破砕粒が生じ、遅すぎると莢がはじけ、収穫ロスが大きくなる。
- 茎水分の高い朝・夕や露のある時は絶対に刈り取りをしない。
- 収穫時の汚損粒の発生防止のため、青立ち株や大型雑草は、刈り取り前にほ場から除去する。
- 泥かみ防止のため、低く刈りすぎない。(目安は下から15cm程度)